

高温障害に負けない米作りのために、適切な水管理を行いましょう！

水管理のポイント

高温対策には、稲体の温度を低下させるためのこまめな水管理がポイントです。水管理で最も重要なことは、**水不足にしない**ことです。根から水を十分に吸収させ蒸散を活性化し、稲体の温度上昇を軽減させましょう。

生育 ステージ	移植	活着	分けつ期	幼穂形成期	出穂期	登熟期	成熟期	
水管理	湛水	浅水	間断灌水	中干し	間断灌水	常時湛水	間断灌水	落水

- 中干し前後は、**間断灌水により水と酸素を与え**、根の成長と幼穂の形成を健全にします。
→間断灌水とは？
水尻を止め3cm程度の浅水状態に入水する⇒自然に落水するのを待つ⇒再び入水するを繰り返します。
入水するタイミングは自然落水して1～2日後の田面の土が乾き切る前です。乾かしすぎは逆効果になるので注意します。
- 出穂後は、**稲の成熟にとって水が必要不可欠**です。田面が乾かないように登熟期前半までは湛水状態を保ち、登熟期後半は間断灌水を行いましょう。落水は、収穫7日前に行います。

! 猛暑日や異常高温など緊急時には、水の入れ替えや冷たい水を流し込む「かけ流し」により、水温や地温を下げることは有効ですが、地域全体の水利状況に配慮する必要があります。

中干の効果とポイント

効果1 根を健全にする

中干により土壌に酸素を補給することで、根張りの向上やガス湧の軽減などに繋がり、倒伏や高温障害にも強くなることが期待できます。

効果2 過剰な分けつを抑制する

分けつが過剰になると、穂数や籾数が必要以上に増加し、籾のデンプン充実度が下がり、乳白粒などの原因になります。中干により、稲の窒素吸収を抑えることで、過剰な分けつを抑制します。

効果3 田面を硬化させる

中干により土壌が硬化すると、収穫前に早期落水をして土壌を硬化させる必要がなくなるため、登熟期後半まで稲に十分な水分を供給することができ、登熟の向上効果が期待できます。
また、土壌が硬化することで、コンバインなどの機械作業もスムーズに行うことができます。

中干しのポイント

○中干し開始の目安

茎数（穂数）が目標の8～9割を確保した頃に開始します。
田植え後約40～45日。

○中干しの期間

基本的に5～7日間。圃場の条件によって期間を調整します。

○中干しの程度

田面にひび割れができ、軽く足跡が残る程度まで干します。

品種	田植え時期	中干し開始
コシヒカリ	5月上旬	6月中旬頃～
ほしじるし	5月下旬	7月上旬頃～
ハツシモ	6月上旬	7月下旬頃～



過剰な中干は稲の断根を引き起こし、その後の生育に悪影響を及ぼすので注意しましょう。